

のかたわら、中山竹山・履軒に学んで、儒教的合理主義をまとめ、その上に立脚して自然科学的合理主義の体系化に進んでいった、と指摘された。著者の蟠桃研究の全貌は、第三作の完結まで待たねばならないが、「夢之代」の整備にみられるような網羅的・基礎的な作業、あるいは、厳密な史料操作による、蟠桃という人物像の全体的再構成の方法は、第二・第三作の展開に期待をいだかせるとともに、読む者それぞれに多くの考察材料を提供しているといえよう。

(A5判 本文二二二六頁 写真二〇頁 昭和四六年三月 清文堂発行 定価二二、〇〇〇円) (大月明・大阪市立大学教授)

岩村登志夫著

日本人民戦線史序説

日本人民戦線の理論的実践的諸経験を全面的に明らかにした著作は未だ無いが、その重要な足掛りが本書である。人民戦線史を問題にするうえで不可欠の日本労働運動史の研究は、研究史としての浅さ、研究者の絶対的不足、資料的制約(最近、戦前の政府官憲資料の覆刻がかなりなされてきたとはいえ)という固有の困難な条件に加え

て、それらの結果というよりもむしろ原因であるが、研究方法についての活発で持続的な議論と共通の認識が無いまま進められてきた。従って日本労働運動史あるいは日本人民戦線史が、日本近現代史の中で、科学的歴史学としての位置を充分に占めているとは言いがたいのが遺憾ながら現状である。

著者の出発点は、労働運動史に則して言えば、日本労働運動の特徴的弱点である組織率の低さと組織の分裂について、従来の研究にあった二つの傾向、即ち一方では、「弾圧と指導者の裏切りと誤謬に単純に帰す」「上部構造的」側面のみの研究と、他方で、主として労働市場の構造的分断から運動の分裂を経済決定論的に説明する研究の両者を止揚する見地であり、労働運動を「なによりも労働者大衆自体の闘争として」えがきだそうとする立場である(補論Ⅱ 日本労働運動の理論と現実)。

本書の構成は本論・補論を含めて合計八つのそれぞれ独立した論文よりなるが、いずれも戦前日本のファンズムに抗する人民の統一戦線運動、人民戦線の歴史を全面的に明らかにするうえで基礎作業である。本書の分量の半ばを占め、その「主軸」

をなす「小岩井浄論—日本人民戦線の歴史的前提とその展開過程—」は、戦前日本の最大の工業地帯であった大阪地方の労働運動が生みだした指導者小岩井浄について、彼が運動史に印した足跡を初めて全面的にかつ正当に位置づけたといえるが、読者はこの「小岩井浄論」によって、第一次大戦から第二次大戦までの日本の労働運動・農民運動・無産政党運動の大きな流れを新しい観点でつかみとることができよう。農民労働党や新労働党、そして大阪港南地方全労総同盟合同促進協議会など、二〇年代から三〇年代にかけての小岩井浄に代表される統一戦線運動の誇りうべき伝統は、たとえそれが苦悩と最終的には敗北への道程ではあっても、この時期を分裂と抗争のいわゆる「暗い谷間」として簡単にかたづけざることをはや許さない。

岩村氏の研究方法のすぐれた特徴は、日本労働運動史を国際労働運動史の不可分の一環として、かつ日本資本主義発達史との構造的運関の中で把握しようとするところにあり、それは、豊富な語学力を駆使した外国文献の利用(補論Ⅲ ソ連における日本ファンズム論の展開によせて)や、広範な聞きとり調査を含めての丹念な実証的作

業に裏打ちされて、著者の歴史叙述をして読者に蔽密で奥深い印象を与える所以である。また従来の政治主義的な見解や、いわゆる通説に対しては大胆な再検討が試みられており、たとえば、日本資本主義の相対的安定期についての野呂栄太郎以来の通説に対する批判(序章 一九二〇—三〇年代の人民闘争)や統一労働者政党の問題で、一九二九—三〇年の新労農党に関するコミンテルンの第六回大会テーゼの直輸入的見解に対する批判(Ⅱ 新労農党論)など、数多くの重要な問題提起がなされている。

本書は著者の「あとがき」にもあるように、日本人民戦線史に関する将来の全面的な分析のための序説であり、その役割は充分に果しているといえよう。もちろん本書といえども従来の研究成果の批判的総括のうえになりたっており、学界の共有財産ではあるが、高等学校の歴史教育に携わってきた中で書きつがれてきた本論文集の成果は岩村氏個人の努力に俟つところが大である。しかし著者も言うとおり、戦前日本の人民の闘争の全体的把握は各分野の研究者の共同作業あってはじめて可能であり、理論的実証的研究はまだまだ不十分であるとしなければならぬ。たとえば、本書が重

点とした労働運動史の分野においても、本書のごとき大阪地方に関する精密な研究は関東地方については未だなされていない。

今後、研究者の積極的な集結が期待される所以であるが、著者は本書執筆後も既に精力的に作業を進めており、著者自身による人民戦線史の全面的な概観を得ることもさして遠い将来ではなさそうである。

(A5判三二六頁 昭和四六年五月 校倉書房刊 定価二〇〇〇円) (上野輝将・京都大学大学院学生)

「史林」投稿規定

本誌の投稿規定は次の通りです。

- ◇資格本会会員であること。
- ◇投稿受付原稿の種類・長さなど。
- 研究論文・研究ノート 四百字詰五〇枚程度。以上には四百字以内の「要約」と「英文要約」(研究論文のみ)添付のこと。
- 学界動向、批判と反省 四百字詰三〇枚以内。
- 書評 四百字詰二〇枚以内。
- 紹介 四百字詰三枚程度。
- ◇送先『史林』編集委員会宛。

委員会だより

◇史林の編集もようやく軌道にのり、最近ではどの研究室も期日まで原稿を揃えることができるようになりました。これもひとえに会員皆様方の御協力のためものと感謝致しております。編集部としても、今後できるだけ編集に趣向をこらし、会員の皆様の御期待にそうべく尽力致しますので、御意見、御感想を委員会宛にお寄せください。

◇尚、先号でお知らせしましたように、この号から会費を値上げせざるを得なくなりましたので御了承ください。(大谷)

一九七二年四月二五日印刷 定価四五〇円
一九七二年五月一日発行

史林 (第五五巻第三号)

発行人 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史学研究会

理事長 羽田 明
振替京都五一五五番

印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社